



特集

いま、備える

「平成 30 年北海道胆振東部地震」昨年 9 月に発生したこの地震で、北海道では初めて最大震度 7 を観測しました。地震に限らず自然災害はいつ発生してもおかしくはなく、決して他人事ではありません。

この地震から 1 年。今月号の特集では、あらためて自然災害の恐ろしさを知り、備えの必要性など私たちが今できることを考えたいと思います。

北海道胆振東部地震から1年

平成 30 年 9 月 6 日午前 3 時 7 分に胆振地方中東部を震源とするマグニチュード 6・7 の地震が発生。

道内では、厚真町で震度 7 を観測し、安平町およびむかわ町で震度 6 強を観測。倶知安町でも震度 4 を観測したこの地震により、1 万 6 千名を超える方が避難所などでの生活を強いられ、他、道内全域の約 29.5 万戸で停電（ブラックアウト）、44 市町村の約 6 万 8 千戸で断水が発生するなど、生活する上で重要なライフラインにも影響がありました。

地震の被害を 目の当たりにして

苫小牧市（震度 5 強を観測）にある自宅で就寝中に地震に遭い、その後、職場がある厚真町でその被害の大きさを目の当たりにしたという川原拓也さん（倶知安町出身）は、当時についてこう話します。

「地震直後は東日本大震災の光景が頭をよぎり、津波の発生

多くの支援者が被災地に 復興への手助けを

厚真町・安平町・むかわ町の 3 町では、地震発生後すぐにボランティアセンターが開設され、全国各地から多くのボランティアが集まりました。その数は 3 町合わせて 1 万 2 千名を超え、がれきの撤去作業や家屋内の清掃活動などを行いました。

被災地では、現在も仮設住宅で暮らす方がいるなど、大変な状況が続いていますが、多くの支援により復興への道を進んでいます。

③

②

①

⑤

④

①②地震により倒壊した建物
③土砂に押しつぶされた農業機械
④⑤コンテナや農産物が散乱
※北海道胆振東部地震被害写真
（とまこまい広域農業協同組合提供）

がないかを確認し、次に職場の状況を確認しました。テレビでは、近隣の安平町やむかわ町において大きな揺れを観測したと報道されていましたが、厚真町の情報が無く、どのような状況になっているか分かりませんでした。ブラックアウトのため、明るくなってから職場へ向かうと馬鈴薯やコンテナ、事務所ではパソコンや棚が倒れ、足の踏み場もなく、昨日までとは全く違う光景に衝撃を受けました」

さらに、今でも当時のことは、鮮明に覚えており、一生忘れることはありませんと話してくれました。

【北海道胆振東部地震の主な被害】

- ・人的被害
死者 43 名
負傷者 782 名
- ・住家被害
全壊 469 棟
半壊 1,660 棟
一部損壊 13,849 棟
- ・避難者数 16,649 名（累計）

※平成 30 年北海道胆振東部地震災害検証報告書より

倶知安町からも職員を 被災地に派遣

ボランティア以外にも自衛隊や消防、警察などさまざまな機関が被災地に職員を派遣し活動を行いました。倶知安町からも「災害時等における北海道及び市町村の相互の応援等に関する協定」に基づき、昨年の 9 月と 10 月の計 2 回、合わせて 5 名の職員を被災地へ派遣し、家屋の被害調査や役場業務の支援などの活動を行いました。

9 月 23 日から 27 日の 5 日間、厚真町へ派遣された住民環境課の嶋良太係長は、その時の経験をこう振り返ります。

「主な業務は避難所などに送られてきた救援物資の受け入れ作業でした。そこでは、さまざまなところから物資が届けられ、中には道外から車で直接届けにきてくれた方もいました。その人たちの支援の思いは、現地にいたからこそ強く感じられ、その思いを少しでも届けようと仕事をしました」

今できる備えから始めよう

災害への備えについて、何をしたら良いかわからないという方は、まずできることから始めてみませんか。

すでに万全という方でも、再確認をしておきましょう。

②身の回りの危険を知ろう

災害は住む地域や建物の形式、発生した季節や時間などで、被害の大きさは変わります。自分の地域の避難場所や浸水・地すべりなどの危険箇所は事前に防災マップ（ハザードマップ）で確認しておきましょう。

また、屋内では地震などで家具の転倒や落下、屋外では暴風で物が飛んでくるなどの危険があります。事前に家具のネジ止めや、屋外に物を置かないなどの対策を行いましょう。



いつ、どこで、何が起こるかわからない。もしもの時に役に立つのは備えや訓練など普段からの積み重ねです。自分や家族の身を守る意識（自助）と、地域の人たちがお互いに協力し助け合う意識（共助）が、防災・減災のためには大切です。

9月1日は「防災の日」です。この機会にあらためて、家族や地域の人と一緒に災害への備えについて見直してみましょう。



①備蓄をしよう

災害が発生したときには、電気や水道の他、物流にも影響が出ることがあります。避難所生活だけではなく、自宅にとどまる場合でも、日頃からの備蓄が大切です。備蓄量の目安は3日分の生活ができる程度です。

加熱の必要がない乾パン・缶詰などの食品や飲料水、簡易トイレや携帯ラジオなどをひとまとめにしてすぐに持ち出せる場所に置いておきましょう。

③コミュニケーションを取ろう

災害が発生したときに、必ずしも家族全員が一緒とは限りません。日頃から、電話以外の連絡方法や避難した際の集合場所などを家族で確認しておきましょう。

また、地域による助け合いも大切です。高齢者や乳幼児などがある家庭では、避難などが迅速にできない場合があります。日頃からコミュニケーションを取ることが、地域で災害を乗り越えることにつながります。

町に迫る危険 襲う災害

昨年9月に発生した地震は、倶知安町にも大きな影響を与え、自然災害が決して他人事ではないと感じた方も多かったことでしょう。

過去にも町では、平成5年に発生した北海道南西沖地震などで、今回の地震と同じ震度4を観測しています。

また、風水害や雪害といった地震以外の災害も数多く発生しており、特に風水害では、台風や集中豪雨の影響による倒木や河川の氾濫などで、住宅や道路、農業などに多くの被害をもたらしました。

56（ごーろく）災害

倶知安町の歴史で過去最大級の豪雨災害に、昭和56年8月の豪雨災害があります。

通称 56 災害と呼ばれるこの災害は、台風15号が町内を襲った8月22日から23日にかけて降り続いた豪雨により多くの被害がもたらされ、2日間の降水量は161.5^{ミリ}で、台風が直撃した23日の降水量134.5^{ミリ}は24時間降水量の観測史上2番目の記録でした。（1位は昭和37年8月3日の180.9^{ミリ}）

この豪雨と台風では、尻別川など町内の河川で、氾濫や堤防の決壊が発生し、農地や道路への冠水の被害があった他、町内複数の地域では住宅の浸水被害も発生、市街地を含む3地域5戸で住宅床上浸水があり、6地域50戸で住宅床下浸水がありました。

また、当時の日本国有鉄道胆振線の寒別・北岡間では線路が流失し、復旧までの約2カ月間、代行バスが運行されるなど、長期間にわたり生活にも影響があった災害となりました。



寒別橋から見た尻別川



金毘羅寺周辺の様子



旧胆振線の線路が流失（昭和56年8月23日）



復旧後の左の写真の地点（昭和56年10月29日）